

# 明治～大正期における音楽と時代の関連性から考察する近年の音楽

## Recent Music Examined through the Perspective of Relevancy in Musical and Historical Backgrounds in the Meiji – Taisho Period

(2014年3月31日受理)

小野 文子 廣畑まゆ美  
Ayako Ono Mayumi Hirohata

Key words : 音楽, 近年, 伊沢修二, 山田耕筰, 中山晋平

### 要 旨

2013年3月に執筆した「芸術と社会の関わりを強めるために-地域の音楽活動を事例に-」の調査では、地域の音楽活動や先人の音楽活動の実例をもとに、現代における音楽と社会の関わり方の希薄さを述べた。比較対象として山田耕筰の調査を行っていたが、山田の音楽の発展の陰には、彼の「すぐれた時代を読む力」があったことがわかった。明治から大正にかけて、列強諸国に追いつこうと必死の政府、企業の方針が文化にまで及んだことが、芸術家にとっては追い風となっていた。複雑化する中で、近年の音楽はどのような時代背景とともに今の姿になったのか？また今後、音楽文化が発展していく中でどのようなことが課題になるのか？明治、大正、昭和の日本における音楽と社会の動きを考察しながら、近年の音楽を社会的な視点を交えて考察する。

### 1. 執筆の経緯

明治期・大正期と比較し、現代の音楽は社会との関わりが希薄であると考え、音楽のジャンル・音楽に対するニーズが多様化しすぎていて、世の中を象徴する動きがない、と言ったほうがいいかもしれない。2013年3月に執筆した「芸術と社会の関わりを強めるために-地域の音楽活動を事例に-」の調査では、地域の音楽活動や先人の音楽活動の実例をもとに、現代における音楽と社会の関わり方の希薄さを述べた。比較対象として山田耕筰の調査を行っていたが、山田の音楽の発展の陰には、彼の「すぐれた時代を読む力」があったことがわかった。明治から大正にかけて、列強諸国に追いつこうと必死の政府、企業の方針が文化にまで及んだことが、芸術家にとっては追い風となっていた。山田も三菱財閥の岩崎小弥太の援助を受けて留学することができ、オーケストラを組織することができた。現在も慣習的に企業や国が優れた

学生を海外に送り出し、学費を免除しているものの、スポーツ等ほかの分野の件数と比較すれば、芸術分野への投資額は低く、注目度も低い。予算削減で一番に目をつけられるのは文化関係事業である。2010年に民主党が事業仕訳を行ったが、その際対象となった芸術関係の組織は、

- 芸術創造・地域文化振興事業
- 芸術家の国際交流
- 伝統文化こども教室事業
- 芸術文化振興基金
- (財)新国立劇場運営財団、(財)おきなわ運営財団((独)日本芸術文化振興会から業務委託)
- 世界にはばたく新進芸術家等の人材育成
- 子どものための優れた舞台芸術事業
- 学校への芸術家派遣事業

など8つ。ちょうどリーマンショックが前年起り、世の中での意識が経済にシフトしている時期であったことも

影響している。2011年に東日本大震災が起り、さらに経済は混迷を極め、芸術家にとって支援（金銭面等）をもらうには苦しい社会情勢であったと推測できる。しかし、現代社会へのメッセージをもった芸術はいま飛躍的に成長し、世界から注目されている。2000年代から広がり始め、当初はほんのわずかな地域でしか行われていなかった「芸術祭」だが、行政や企業、学校など様々な利害関係者が絡み合いながら現在全国津々浦々で開催されるようになった。2014年には札幌、新潟、千葉、山形、愛媛などで開催される。2013年9月29日の日本経済新聞プラス1「なんでもランキング」のコーナーでは、芸術と観光が楽しめるアートフェスティバルのランキングが掲載されていた。日本経済新聞の購読層に発信する内容としても、芸術祭は魅力のあるものなのだろう。しかし芸術祭のメインとなるのは「美術」であることが多い。形が半永久的に残る美術に対し、音楽は録音などを行えば別だが、出した音は、その瞬間しか残らない。また、音楽の特に難しいのが、創作の対象が違うものが両者成り立つところだと考える。要は、作曲家と演奏家、それぞれに創造性がある。新しい曲を作って発信する人、美しく奏でることを極める人、近年では新たな「音」そのものを創造する人など、音楽と人との関わりが多様化している。複雑化する中で、近年の音楽はどのような時代背景とともに今の姿になったのかを考察するとともに今後、音楽文化が発展していく中でどのようなことが課題になるのかを明治、大正、昭和の日本における音楽と社会の関わりを例にアプローチしていく。

## 2. 研究方法

方法：文献調査

明治期は西洋音楽が日本にどのように広がっていったか、社会のどのようなニーズと結び付いたかを概要として振り返る。大正期は山田耕筰の活動と社会の関係、また同時期に活躍した他の音楽家や社会の動きを見ながら、多様化する音楽と発展の要因を探る。大正期から昭和にかけてのキーパーソンに中山晋平がいる。彼は東京音楽学校を卒業し、西洋音楽ではなく、流行歌や唱歌の制作に力を入れていた。音楽以外の分野の知識人との密な交流や、当時の技術発達などからこの時代に現れた音

楽の新しい動きを考察する。そしてそれらを踏まえ、近年の音楽シーンを文献より考察する。

## 3. 時代のニーズと音楽の変貌

【1】明治期 —伊沢修二が目指した近代化—

264年続いた江戸幕府が終わり、日本は近代国家として成長するために必死であった。先進国の文化を吸収しようと、ありとあらゆる施策を行った。明治4年に文部省を設置すると、学制取調掛を任命し、その答申を得て明治5年8月に「学制」を制定した。学制では、下等小学の「唱歌」、下等中学の奏楽の科目が「当分之を欠く」とされた。後にこの唱歌実施の先達となったのが、伊沢修二（1851～1917）であった。明治8年、アメリカに飛び立って現地の教育を調査、12年には音楽取調係を設置。13年にはボストンの音楽教育家メーソンが招かれた。列強諸国の文化を取り急ぎ吸収して作った音楽取調掛は、唱歌集や箏曲集の編集や、楽器試作、俗楽の改良を行っていたが、明治20年に東京音楽学校となった。必要に迫られながら迅速に音楽教育の体制が作られた。伊沢はもともとマーチングドラムを叩いていたものの、音楽の専門家ではない。西洋の歴史に通じ、言語習得をしていたいわばエリートで、当時日本の教育制度等を整備していたお抱え外国人との交流で一役買っていたことが大いに影響している。音楽取調掛だけでなく広く教育に携わり、文部省、東京師範学校校長補、東京師範学校校長、体操伝習所など様々な業務を経験。このように音楽だけでなく多まらない広い視野を持ち合わせていたために、責任者としてスピーディに判断を行い、音楽教育体制の礎が築かれたのである。しかしこの音楽教育は文化面の育成という目的だけでなく、修身（第二次世界大戦前の小学校科目のひとつ）の側面もあった。音楽取調掛が編纂した「小学唱歌集」初編にある伊沢修二による「緒言」では、小学校唱歌の目的について下記のように述べた箇所がある。

「徳性ヲ涵養スルヲ以テ要トスヘシ」

伊沢修二は音楽取調掛を作ったが、音楽での功績があるわけではなく、むしろ教育全般を整備した人物として

理解されている。幅広い視野のもと行われてきた判断は富国強兵、列強諸国に迫つき、追い越すことが国に掲げられた目標であった。所々で「徳」について述べられているこの「緒言」に加え、発表された唱歌の歌詞にもそれらを伺わせる内容が盛り込まれている。明治43年に発表された「我は海の子」を一例にすると、この曲は現在3番の歌詞までが浸透しているが、7番まで存在する。敗戦後、7番の歌詞が国防思想や軍艦が登場するという理由でGHQの指示により教科書から削られた。

七. いで、大船を乗出して  
 我は拾わん 海の富  
 いで、軍艦に乗組みて  
 我は護らん 海の国

昭和22年以降、小学校では3番まで教えられるようになり、この歌詞は知る人ぞ知るものとなってしまった。また、学校教育以外でも西洋文化偏重の傾向は強く1883年に完成した鹿鳴館も西洋の様式を取り入れた建築で、西洋の文化を体験しながら外交を行うことで列強諸国に近づこうと取り組んでいた。この歌詞の例や鹿鳴館から見受けられるように、この時代は音楽が普及した、というよりは、近代国家へと成長するために利用されたと言える。しかし西洋音楽が日本に浸透するひとつのきっかけになったのは確かであろう。評論家で劇作家の菅孝行氏が2011年に開講した変革のアソシエ講座「日本の『近代化』と天皇制」において、「鹿鳴館時代を通して近代の知に遭遇できた。」と述べている。こどもたちは唱歌を学習する過程で、徳を学び、西洋音楽のリズム・メロディーを習得していった。このような礎を築いた音楽取調掛は1887年に東京音楽学校へと発展解消する。唱歌教育を受けた子どもたちが成長し、東京音楽学校に通う学生も増えた。後に一世を風靡する滝廉太郎や幸田文、山田耕筰や中山晋平など後世に名を残す音楽家を輩出する場所へと成長していった。

伊沢が音楽のこのみでなく、日本に求められた課題に的確に取り組む視野の広さがあったからこそ、今日の音楽教育の礎が築かれたのである。

## 【2】 大正から昭和にかけて

政治・社会・文化の各方面における民主主義、自由主義的な運動、風潮、思想が沸き起こった時期である。社会における人々のニーズも多様化してきた。2度にわたる戦争、1945年の原爆投下、敗戦など恐ろしい出来事も多かった。多くの芸術家が社会情勢から刺激を受けた時期である。また芸術家は日本を離れて海外で知識を習得し、文化のレベルを高めることにも焦点を当てていた。自分の気持ちを代わりに述べてくれるかのような、社会情勢を表現の材料とした流行歌が現れたのもこの頃である。音楽以外にも、文学、美術など様々な分野で試行錯誤が行われていた。主に2名の人物に迫り、この時代の音楽の興隆のきっかけと時代感を探る。

### (1) 山田耕筰の時代感

山田耕筰が大きな志をもち、精力的に活動を行っていたのがドイツ留学から帰国した1914年から1917年にかけてである。このころ文学では「白樺」、美術では「フェウザン会」、婦人の芸術活動「青踏社」のように社会では優れた才能を持つ人たちが集まり、目的意識を統一しながら、自身の活動と社会の関わりを模索しながらアウトプットしていた。山田はこれらの活動を横目に当時の音楽界を1956年に日本経済新聞にて連載された私の履歴書において下記のように振り返る。

「そのころの日本の楽界は全くゼロにひとしかった。上野の音楽学校と宮内省楽部にオーケストラらしいものはあったが、芸術と呼び得るような音楽は皆無だった。」

1914年ドイツ留学から帰国したばかりの山田は、ドイツ音楽の高い伝統に敗北感を感じ、演劇に安住の地を求めようになっていた。しかしながら、山田がここで演劇に転向しなかったのは、山田の後援者である岩崎小彌太男爵の存在である。このころから、企業が自社の稼いだお金を芸術家に投資し、自社のイメージアップを図ろうとする動きがみられるようになった。岩崎の手前、途中で投げ出すわけにもいかず音楽の勉強を貫いた。朝日麦酒社長の山本為三郎も山田と同時代を生きた企業家である。山本の場合は、ちょうど外国の音楽が日本に入り始めたころで、海外の音楽家の活動を支援するとともに、自社製品を購入しているお客様への還元コンサートとい

う形でしばしば演奏家なども開催した。この時期は国家政策というよりも、企業家が芸術家に注目し、経済的な成長のために投資する対象となったのであろう。音楽家も世界に直面し、活動したいことが多かった分、金銭面を援助してくれることはさぞ心強かったと考える。加えて大企業のお墨付きをもらえることは、多方面での信頼関係の構築にも役立つ。極めて野心的なやり方ではあるが、このように社会における地位を確立したことは文化を育てる上で多に役に立った。

山田は、日本初の管弦楽団を造るなど日本において西洋音楽の普及に努めた。また、ニューヨークのカーネギー・ホールで自作の管弦楽曲を演奏、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団やレニングラード・フィルハーモニー交響楽団等を指揮するなど国際的にも活動、欧米でも名前を知られた最初の日本人音楽家である。軍歌の作曲も多く手がけているうえ、晩年は童謡の制作にも力を入れていた。日本語の抑揚を活かしたメロディーで多くの作品を残した。西洋から富国強兵のために利用された音楽が芸術性を帯びてきたのは、芸術家の意識の成熟と、経済成長を目指す企業家の援助の相乗効果と言える。これまで日本人が知らなかった音楽を御雇外国人からではなく自らの五感を使って現地で取り入れ、かつ日本人になじみができるように工夫された楽曲づくりを行い、広く発信していったのは大変センセーショナルなものであったと考える。社会に自由な空気が漂い始め、様々な創作活動が起こっていた大正時代の空気感にも山田の活動は合っていた。

## (2) 中山晋平の時代感

山田と同時期に活躍した音楽家に中山晋平がいる。昨年度の筆者の論文「芸術と社会の関わりを強めるために―地域の音楽活動を事例に―」において山田耕筰について調べた際、山田の活動と同時期に活動した作曲家として名前が出てきた人物である。彼は当時の人気女優、松井須磨子の「カチューシャの唄」を手掛け大ヒットさせている。中山の音楽は、山田のように音楽の質の向上を目指したものではなく、日本で起こっている問題や活動、思想等の社会情勢を反映した音楽であった。中山の音楽の発展と切って切り離せないものは文学と蓄音機である。

中山は早稲田大学で教鞭をとる島村抱月の書生として働く傍ら、音楽学校入学に向けた勉強を行っていた。島村は1906年に坪内逍遙らと文芸協会を設立。1909年には付属の協会附属の演劇研究所において本格的に新劇運動をはじめた。その後トルストイの小説をもとに島村が脚色した「復活」が話題となり、主題歌の「カチューシャの唄」が大ヒットした。この主題歌を作曲したのが中山である。ヨナ抜き音階で作曲されているにも関わらず、「ララ」という「軽さ」を投入することで、西洋的な雰囲気を出すことに成功した。共感した多くの人々がこのレコードに殺到し、たちまち2万枚売れた。音楽の良さはもちろん、歌詞に対する評判、演劇に対する評判もよく、自由な思想の蔓延がこの曲へのニーズを更に後追した。またこの2万枚という販売数は当時の蓄音機の普及台数に匹敵する量であったようだ。蓄音機は1877年にトーマス・エジソンによって発明され、その後1887年にエミール・ベルリナーによって円盤型レコード蓄音機が発明された。ベルリナーの遺産を引き継いだのがエルドリッジ・R・ジョンソン、米国ビクターの初代社長で、日本ビクターも後に設立した。エジソンの円筒レコードを取り扱ったのが日本コロムビアで、ビクターに対抗した。日本で蓄音機が製造されるようになった1909年より録音技術に対する熾烈な争いが始まったが、その過程で、両者の技術はめまぐるしく向上した。昭和に入ってから日本コロムビアと日本ビクターは首位競争が繰り広げられ、コロムビアは古賀政男、ビクターは中山晋平を専属として様々な音楽を世に送り出していた。レコードの普及で沢山の人が音楽を聞いてもらうことができるようになったことは勿論、販売収入源となり経済的にも潤った。

また1911年には平塚らいてうが主宰する女流文芸誌『青踏』が発刊された。この年、日本文芸協会はイブセンの「人形の家」を上演したが、主人公ノラの生き方が青踏の女性たちの思考を刺激したことも社会現象となった要因と考えられる。青踏社でこの演劇に関する講評を記載した「ノラ特集」が組まれるなど、分野を越えてお互いを刺激し合っていた。同時代を生きる別分野(文学・演劇など)の人々との交わりと、技術の発達により、中山は流行歌という分野の音楽を広げていくことができたのである。ここでも世の中のニーズが作家のアウトプッ

トするものと一致することで興隆していることがわかる。

### 【3】 明治期・大正期のまとめ

伊沢修二、山田耕筰、中山晋平と特定の人物にスポットを当てて、社会と音楽の関わりを俯瞰したが、音楽文化の発展と世の中の動きは密に関係していることが伺える。伊沢の時代は富国強兵、国の西欧化、子どもの修身教育、山田の時代は企業のイメージアップや経済政策、中山の時代は民主主義の広がりや技術発達といったように、その当時社会で求められていることと結び付き、音楽の質が相乗的に向上している。

## 4. 現代の音楽

昭和の後半、平成に入り音楽シーンは大きく変わった。メディアの発達が進み、人々の音楽の聴き方・出会い方が多様化している。流行歌も歌謡曲や演歌、グループサウンズによるロック等さらに細分化されている。聴き方・出会い方に関しては、CD等の音源購入、レンタルショップでのレンタル、データでのダウンロード、インターネット上での無料閲覧、舞台を見に行くなど様々だ。

1952年以降、人々の飛行機による行き来が可能となり、海外から受ける影響がかなり強くなった。1970年頃、音楽家とアンディ・ウォーホールがけん引していたPOPアートに取り組む美術家との結び付きが密接になった。彼らの活動はしばしばアバンギャルド（前衛的）と呼ばれ、鑑賞者や聴衆をこれまでにない技法で驚かせた。シェーンベルクによる「十二音技法」、ケージによる「偶然性の音楽」等が生み出され、これまでのヨーロッパ音楽の作曲ルール等を手当たり次第次々と破壊。破壊していくことで人々の思考の常識を再度問いかけた。日本人では音楽家の一柳慧などがこの活動に関わり、彼らの影響を受けた作品を発表している。調性のある曲は取るに足らない曲として位置づけられ、音の響きそのものを楽しむような楽曲の検討、楽器そのものを壊すパフォーマンス、正規の奏法を変える（ピアノの弦をはじく）等様々な試みがなされた。アンディ・ウォーホールの代表作「キャンベルのスープ缶」（1962年）では、大量生産大量消費社会を暗に批判している。それと同様現代の音楽は既存の概念を打ち破り、鑑賞者の思考をいまいちど問

い直すかのような強いメッセージを放っている。暗喩的に現代社会への抵抗を含んでいるとも言い換えることができる。しかし、仮にそのようなメッセージがあったとしても、どれほどの人がそのメッセージを感じ取れるのだろうか。説明してもらえれば理解ができるかもしれないが、第一印象としてやってくる不協和音を受け入れることができるのだろうか。当初現代音楽の作曲家は聴衆に受け入れてもらえないことこそが重要課題と提言していた。状況に危惧を感じたのか少しずつ妥協が見られるようになり、調整を音楽に取り入れるなどの実験を行っている。このことから現代音楽の作曲家たちも不協和音に課題を見出していることがわかる。しかしこうして当初の思考が薄まってくると、後の世代に残るものは「不協和音」「何だかよくわからない音楽」「破壊」等部分的なパーツの印象のみであり、この時期活動した音楽家の志が伝わらなくなってしまう。『「クラシック音楽」はいつ終わったのか？—音楽史における第一次世界大戦の前後—』（岡田暁生、p. 123）において興味深い一説がある。

バロック音楽が人々をひきつけた理由の一つとして、当時の作曲家がまだ「職人」であって、「芸術家」ではなかったということが挙げられる・・・（中略）・・・十九世紀ロマン派の理解する芸術家が俗世を超越した存在だったとすれば、職人に求められるのは何より、世間のニーズに黙々と応えることである。

ここでいう「職人」は現代で置き換えると、流行歌を作る人、つまり社会のニーズに合わせて曲を作る人たちであり、「芸術家」に当たるのが現代音楽で音楽そのものの価値を考え、俗世から超越し、創造していく人たちと言えるだろう。どちらの存在も重要でありそれぞれが役割をもっている。しかし現代の芸術家たちが当初不協和音への取り組みを行っていたにも関わらず、ウケが悪いことから調整音楽へと原点回帰していく姿からその価値創造に迷いが見え隠れしている。音楽分野の中で「ジャンル」により妙な住み分けが行われてしまったがために、各ジャンルが多様になりすぎた聴衆のニーズと価値創造の中間点を模索している状況である。

## 5. 考察・今後の課題

富国強兵、企業のイメージアップ、技術の発展など社会の前向きな発展と肩を並べながら、質を高めてきた明治・大正期と比較し、現代の音楽は資金面での援助や、国の方針として組み込んでくれるような、当初ほど追い風となる社会の動きがあまり見受けられない。痛烈に社会を批判するメッセージ性・創造的な要素が強くなっており、鑑賞者を受動的な存在から能動的な存在へと変えていくような実験的な取り組みがなされている。ある意味成熟した文化にしかできないことに取り組んでいる状況といえるだろう。しかしながら、多様化していく人の価値観・ライフスタイルにより、様々なジャンルの音楽が台頭し、音楽をひとつくりにとらえることが難しくなっている。今一度、音楽と言う学問をみなおし、そのジャンルが何を目指すのかは少なくとも明確にしておくべきであろう。成熟した文化もうまく使えなければ、たとえそこに意味があったとしてもただ楽器を破壊し、不協和音を鳴らすだけのパフォーマンスとくられ終わってしまう。そして常に表現と社会の流れはリンクして考え、世の中にどんなメッセージを発信することが必要なかを問い続けなければならないだろう。伊沢も、山田も、中山も偶然社会の動きと自分たちの発信した音楽がリンクしたわけではない。能動的に音楽と社会両者を常にリンクして考え行動した結果そうなのである。

今回は文献による比較調査のみにとどまってしまったが、平成25年一般社団法人コンサートプロモーターズが行ったインターネット調査では、ジャンルごとの集客人数が詳細に比較されている。これより音楽のジャンルが世の中のどのような層から必要とされているのか等、詳細に調べてゆき、音楽の今後の発展の可能性を探りたいと考える。懸念すべきは増えていくジャンル同志が対立し、迎合し、音楽とは何か？を問われたときに明確に示せるものがないのではないか？という現状である。先人が世の中のニーズと連動させて成長させた文化に、今後どのような可能性があるか引き続き調査を進めてゆく。

## 【参考文献リスト】

- 日本経済新聞社編 『私の履歴書 第三集』 日本経済新聞社, 1960
- 菊池清麿著 『近代流行歌の父 中山晋平』 郷土出版社, 2007
- 和田登著 『唄の旅人 中山晋平』 岩波書店, 2010
- ハワード・グッドール著 『音楽史を変えた五つの発明』 白水社, 2011
- 奥中康人著 『国家と音楽』 春秋社, 2008
- 中川右介 『国家と音楽家』 七つ森書館, 2013
- 武満徹 『没後10年, 鳴り響く音楽(イメージ)』 河出書房, 2006
- アラン・リクト著 『SOUND ART』 株式会社フィルムアート社, 2010
- 中等科音楽教育研究会編 『中等科音楽教育法』 音楽之友社, 2007
- 岡田暁生著 『「クラシック音楽」はいつ終わったのか? —音楽史における第一次世界大戦の前後—』 人文書院, 2010
- 東谷護編 『【双書】音楽文化の現在 拡散する音楽文化をどうとらえるか』 劉草書房, 2008
- 円堂都司昭 『ソーシャル化する音楽 「聴取」から「遊び」へ』 青土社, 2013

## 【参 考 U R L】

- [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afiedfile/2011/01/05/1234912\\_007.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2011/01/05/1234912_007.pdf)
- <http://www.nikkei.com/article/DGXZZ060167260V20C13A9000000/>
- <http://setouchi-artfest.jp/>
- <http://www.asahibeer.co.jp/csr/philanthropy/ab-art/>
- <http://www.shimintimes.co.jp/yomi/aruku/96.html>
- <http://www.acpc.or.jp/marketing/>